

令和元年度可燃ごみ組成調査の結果

1. 可燃ごみ排出原単位の状況について

有料指定ごみ袋制の導入前後における可燃ごみの排出原単位の推移は、下表のとおりです。

【年度単位での比較】

《表1-1》

年　度	排出原単位	増　減	増減率
平成29年度	434.1g	-	-
平成30年度	404.8g	▲29.3g	▲6.7%

※第1回審議会で報告済み。

【導入前後1年間の比較】

《表1-2》

年　度	排出原単位	増　減	増減率
導入前1年間(※1)	430.1g	-	-
導入後1年間(※2)	375.6g	▲54.5g	▲12.7%

※1 平成29年10月～平成30年9月

※2 平成30年10月～令和元年9月

2. 令和元年度可燃ごみ組成調査の結果について

(1) 調査の概要

サンプル収集日：10月25日（金）、26日（土）

サンプル収集量：約480kg（約160世帯分）

木津地域 290kg
 加茂地域 130kg
 山城地域 60kg

調査実施日：10月27日（日）

調査サンプル量：303.84kg

調査方法：調査員23名により、手作業で各項目へ分類

分類項目：約100項目

(2) 指定ごみ袋の種類別使用割合及び比重等

調査サンプルの排出に用いられた指定ごみ袋の枚数は、表2-1のとおりです。

45ℓが最も利用されており、次いで30ℓ、15ℓと続きますが、15ℓと7ℓの使用割合は同程度であり、小さいサイズの需要が一定程度あることが分かります。

《表2-1》

種類	使用枚数	使用割合	表示上の容積
45ℓ	38枚	41.3%	1,710ℓ
30ℓ	23枚	25.0%	690ℓ
15ℓ	16枚	17.4%	240ℓ
7ℓ	15枚	16.3%	105ℓ
合計	92枚	100.0%	2,745ℓ

また、調査サンプルの容積及び見かけ比重は、表2-2のとおりです。

実測容積に対する見かけ比重は、0.17Kg/ℓとなっており、前回調査の0.18Kg/ℓから若干低下しています。

なお、排出に使用された指定ごみ袋の表示上の容積に対する見かけ比重は、0.11Kg/ℓとなっています。

《表2-2》

項目	数値	単位
サンプル重量	303.84	Kg
実測容積	1,786	ℓ
実測容積に対する見かけ比重	0.17	Kg/ℓ
表示上の容積に対する見かけ比重	0.11	Kg/ℓ

【参考：可燃ごみ45ℓの重量】

実測容積に対する重量：7.7kg

表示容積に対する重量：5.0kg

(3) 成分別の重量構成比

《表2-3》

成 分	平成27年度	令和元年度	増 減
プラスチック類	11%	12%	1%
紙 類	33%	26%	▲7%
繊 維 類	6%	7%	1%
草木・木片類	4%	6%	2%
厨 芥 類	43%	41%	▲2%
ガラス・金属等	0%	1%	1%
そ の 他	3%	7%	4%
合 計	100%	100%	—

平成27年度と本年度の重量構成比を比較すると、紙類が7%減少しているものの、構成比が高い成分の順位は同様の傾向となっています。

【重量構成比の上位】

- 1位：厨芥類 41% (43%)
 2位：紙 類 26% (33%)
 3位：プラスチック類等 12% (11%)

(4) 排出原単位に含まれる各成分の重量

表2-3の重量構成比から求めた、平成27年度と有料指定ごみ袋制導入後1年間の排出原単位に占める各成分の重量は、表2-4のとおりです。

排出原単位が減少しているため、多くの成分で減量しています。特に、紙類と厨芥類の減量幅が大きくなっています。

《表2-4》

成 分	平成27年度	令和元年度	増 減
プラスチック類	46.9g	45.6g	▲1.3g
紙 類	145.5g	99.1g	▲46.4g
繊 維 類	28.4g	25.8g	▲2.6g
草木・木片類	18.4g	24.2g	5.8g
厨 芥 類	193.5g	153.4g	▲40.1g
ガラス・金属等	1.4g	2.4g	1.0g
そ の 他	14.6g	25.2g	10.6g
合 計	448.6g	375.6g	▲73.0g

注) 端数調整により、内訳と合計が一致しないことがあります。

(4) 各成分のうち、再生利用又は減量が可能な項目の状況

各成分のうち、再生利用や減量が可能な項目の状況は、表2-5のとおりです。

成分別では減量となっているプラスチック類や厨芥類についても、細分化すると増加している項目があります。

《表2-5》

成 分	主な再生等が可能な項目	平成27年度	令和元年度	増 減
プラスチック類	ビニール・プラスチック容器包装	23.7g	26.5g	2.8g
紙類	再生可能な紙類	51.8g	47.7g	▲4.1g
繊維類	再生可能な繊維類	9.6g	6.6g	▲3.0g
厨芥類	手つかず食品	21.4g	32.5g	11.1g
	一般厨芥類	172.1g	120.9g	▲51.2g
ガラス・金属等	正しい分別で全量の減量が可能	1.4g	2.4g	1.0g
その他の再生利用が可能な項目の合計		18.4g	24.2g	5.8g
再生等が可能な項目の合計		298.4g	260.8g	▲37.6g
排出原単位に占める割合		66.5%	69.4%	2.9%

《全体的な留意事項》

- ① 成分別の「その他」は、掃除機で吸引されたごみや猫のトイレ砂など、各成分への分類が困難なごみです。
- ② 表2-3中、「ビニール・プラスチック容器包装」は、汚れている物を含んでいるため、全てが再生利用できるとは限りませんが、組成調査では汚れた時点が不明であり更に詳細な分類が困難なため、汚れていないければ再生利用可能な物を全て集計しています。

(5) 成果指標の状況

成果指標は、目安に対する単年度の状況ではなく、中期的な傾向を検証することとしています。

一般厨芥類が大きく減少している一方、4つの項目が増加傾向となっており、特に手つかず食品の増加が顕著です。

増加傾向の項目については、今後の動向を注視するとともに、重点的に減量の取り組みを進める必要があります。

また、本調査で減量している項目についても、抽出調査の結果であることを踏まえ、減量に向けた取組みを継続的に実施する必要があります。

《表2-6》

成 果 指 標	単位	現状値 (H27)	令和元年度		傾向	令和7年度 に目指す値
			目安	実績		
古紙類等の混入量	g/人・日	61.4	35.1	54.3	↓	12.3
一般厨芥類の重量	g/人・日	172.1	162.9	120.9	↓	154.9
他の分別(容器包装)の混入量	g/人・日	23.7	11.0	26.5	↑	0.0
他の分別(ガラス・金属等)の混入量	g/人・日	1.4	0.7	2.4	↑	0.0
手つかず食品の混入量	g/人・日	21.4	12.3	32.5	↑	4.3
廃プラスチックの重量 注1)	g/人・日	15.0	14.6	19.1	↑	14.2
不法投棄の認知件数 注2)	件	209	131	(135)	↓	63

注1) 「廃プラスチックの重量」の現状値は、もったいないプランで示された廃プラスチック類の発生原単位です。

注2) 「不法投棄の認知件数」の現状値は、平成29年度の実績です。また、令和元年度実績は、平成30年度の実績を記載しています。(令和元年度4月から11月末までの実績は、91件です。)